

目次

十一番目の災い

5

訳者あとがき
392

主要登場人物

- ウイリアム（ビル）・ウエッソン……………オーストラリア警察犯罪捜査局^C刑事
タイソン……………犯罪捜査局^B警部
- ジミー・スプリング……………〈イーグル・アイ興信所〉所長。私立探偵
マリーリン・シムズ……………〈イーグル・アイ興信所〉秘書
スタンリー・フィッツシャー……………輸入会社社員
- アローラ・テレイ……………ナイトクラブ〈マルコ〉のダンサー
ジヨセフィン・スピロントス……………ナイトクラブ〈グリーン・クカブラ〉経営者
カルロス……………〈グリーン・クカブラ〉ウェイター長
マックス……………〈グリーン・クカブラ〉ウェイター
- ベラ・カルメッツ……………マリファナ密売組織のメンバー
アルノー……………マリファナ密売組織のメンバー
アーサー・ドノヴァン（アート）……………下宿屋〈ダニン〉の主人
リリアン・ドノヴァン（リル）……………アートの妻
ウイニフレッド・コーマック……………〈イーグル・アイ興信所〉の依頼人
ベツラ……………場末の酒場の女主人
- J・モンタギュー・ベルモア……………ラジオドラマで活躍中のベテラン俳優

十一番目の災い

第一章

シドニー。シドニー湾とハーバー・ブリッジの街。ダウン・アンダー^{ダウナー}と呼ばれるオーストラリアの中心地。

この街にあるのは、細長い貿易関連会社のビル群と、明るく賑やかな商店街に並ぶ小さな宝物庫のような店々。ハーバーの岸辺には舗道から高くそびえる広く豪華なマンションが何棟も建ち並び、黄色い砂浜と深く青い海に面して、茂みに覆われた斜面にゆったりとした家屋が建っている。広々としたハーバーを幅広の大型フェリー船が悠々と横切っていく。かと思えば、狭いがらくた店や、地味でうら寂しい小ぢんまりとしたコーヒーショップやワインバーもある。狭く暗いセミデタツチハウスト(一軒の建物の中が二つの住宅に分かれている家)、粗末な共同住宅、そしていくつも密集した不気味で崩れ落ちそうな一間のアパート。人であふれ返る騒々しい狭い路地を、薄汚れたぎゅうぎゅう詰めトの路面電車ラムやバスがガタガタと乱暴に突き進んでいく、そんな街でもある。

太陽がさんさんと照らす温暖な街。誰もが簡単にひと儲けでき、人々はみな気さくで親切な街。一方で、突然の嵐や雷雲に襲われる街。物価は目が飛び出るほど高く、ゆすりまがいの大家と、欲の皮の張った朝食付き宿の女主人のいる街。ここには、ありとあらゆる国の人間が集まって来る。ただし、白人ばかりだ。美しい女と特徴のない男ばかりが目立つ街。そして放浪者とホームレスの集まる悪名

高き街。

シドニー。南太平洋における女王のごとき都市。ところが、この女王は際だった優雅さも見目麗しさもない。陸に大きく入り込んだハーバーの絶景を別にすれば、シドニーには美しいところなどひとつもない。人を寄せつけない険しい表情を浮かべた顔、目の疲れるような赤一色の髪、そして不健康な部分を何か所も抱えた体。漆喰を塗っていないレンガの塔——赤レンガ、茶色いレンガ、レバー色のレンガ、薄汚れたパン生地色のレンガの塔——がいくつも建ち、その上の赤タイルの屋根が、何マイルも先まで続いている。

ところが、夜になるとこうした醜さはすべて隠れてしまう。夜のシドニーは姿を一変させる。生レンガと陰気な石の作り出す印象を、夜闇がぼやかせ、まったく別の景色に見せる。ローブ・デコレテを身にまとった女王は、急に誘惑的に、魅惑的に変身する。昼間は地味な灰色の髪飾りに過ぎなかったハーバー・ブリッジが、きらめく黄金の宝冠となる。点滅する屋上広告は、女王の暗い髪に留まったホタルだ。ハーバーの岸に沿って連なる赤や緑、青や黄色の光は、その胸元を彩る宝石の首飾り。煌々と明かりの灯るフェリー船は、首に巻いた漆黒のベルベットのリボンに散らばる宝石。每晚クルーズに出る遊覧船（カラン号）の目も覚めるようなまばゆい光は、揺れながら輝く胸のペンダントなのだ。

ウールームールーの波止場と、その背後に広がるキングスクロスの、人出が絶えることのないつば——これらは女王のコサージュを留めるきらめくブローチになる。いくつもあつた女王の体の欠点は、夜という化粧に覆い隠され、擦り切れて色あせたドレスのつぎはぎは、スパンコールできらきらと光りだす。一日の終わりに解放感を楽しむ人の群れは、刺すのをやめて飛び回る蚊の大群だ。

そうして女王自身も人々に同調するようにゆったりとくつろぎ、安定した静かな呼吸を始める。まばゆいビーチというブレスレットを両手首にさりげなく飾って。

この瞬間、女王は人の心を惹きつける魔女となる。この時間のシドニーは、限りなく美しい。南の夜空というマンティラに覆われた今だけは、この都市は気高く、もの憂げで、魅惑的だ。そしてほかの大都市同様に、少しばかり狡猾で、少しばかり危険にもなる……。

ある夏の夜のことだ。こうした姿と雰囲気のシドニーの中心に、ひとりの怪しい男がやって来た。髭を生やし、太い黒縁眼鏡をかけている。とある任務を帯びた男だ。

そんな外見では、いかにも人目を引きそうなものだ。が、ここシドニーでは彼を気に留める者などひとりもない。素通りするだけだ。なぜなら、この大都市では男性の十人に三人は大縁の眼鏡をかけており、髭を生やしている者は多くはないものの、珍しくもなかったからだ。シドニーの一般市民で顎髭を生やしているとしたら、それは何かの主張であり、抵抗の体現だ。でなければ、芸術家か作家か音楽家の卵や、公共放送局という人工的な促成栽培温室で弱気だった蕾に大輪の花を咲かせた社交家たちが見せびらかすための象徴だった。

その髭の男はキングスクロスの「ボヘミアン」と呼ばれる外国人街の一角から出て来た。偽りの家庭生活が営まれている例のレンガ塔の一棟で、この一週間ほど人目を避けて寝泊まりしていたのだ。男はキング・ストリートから中心街へ入り、ピット・ストリートをゆっくりと歩きながらサーキュラー・キーへ向かった。まだ夜は浅かったものの、辺りはすっかり暗くなっていた。この緯度の地域では、あつという間に夜のとばりが降りるのだ。どの通りからも人出が消えていた。暗い夜空に、空よ

り黒いハーバー・ブリッジの丸い影がそびえて見えるマーティン・プレイスを過ぎると、ほとんど誰もいなくなつた。

だが、サーキュラー・キーまで来ると、そこはまだいくらか賑わつていた。いつものように、見るからに行く当てのない放浪者たちがフェリー船の棧橋の入口をうろついていた。海面は音もなく揺らめき、波止場沿いの建物の掲げるネオンサインが反射して、赤、青、銀色、黄色、緑にきらめいていた。岸から少し離れた海上では、まるで大きな光の塊のような遊覧船が、金色に輝く絨毯を自ら敷いては踏んでいくかのように優雅に遠ざかつていく。それ以外にもいくつか小さな卵型の光——穏やかに海を渡りたい人向けのシドニー・ハーバー・フェリー船の明かり——が、慌てず、急がず、行き来している。サーキュラー・キーの東側にある第二埠頭では、大型の旅客兼貨物船が一隻停泊していた。フランスのダンケルク港に船籍をもつ〈ビル・ダケム号〉だ。船は遠い母港を出航した後、いくつかの港に立ち寄つて新たな客をひとり、ふたりと乗せて来た。髭の男が探していたのは、そのうちのひとりだった。

髭の男はぶらぶらとその埠頭までやつて来た。ゲートが閉まつていて中には入れなかつたが、柵の向こう側に男がひとり立っていた。誰かを待っているらしい。ゆつたりと煙草を吸いながら、光が反射する海面を眺めている。髭の男のほうを振り向くと、その顔をしばらく凝視していた。それから静かな声で尋ねた。「ムッシュ・カルメッツですか？」

髭の男は驚いたようだ。「ああ」彼は答えた。「そうだ、おれの名前はカルメッツだ」母国語ではなかつたものの、問いかけに合わせて彼もフランス語で答えた。

埠頭のゲートの向こう側で男が背筋を伸ばし、吸つていた煙草を海に投げ捨てた。その背後に、不

気味にそそり立つ（ビル・ダケム号）の船首が見えた。

「その名前の方を探していたんです。特徴も聞いたとおりだ。ムツシユール・カルメッツ、あなたはムツシユール・アルノーに会いに来た、そうでしょう？」

「そうだ」カルメッツは短く答えながら、それがこの男と何の関係があるのだろうかと言った。「そのとおりだ」

「よかつた。ここでムツシユール・カルメッツに会うようにと、ムツシユール・アルノーに言われて来たんです。ムツシユール・カルメッツという人が来たら、ムツシユール・アルノーは船内ではなく、あの大きな橋の支柱の下であなたを待っていると伝えてくれつて。本当ですよ」その礼儀正しいフランス人は熱っぽくまくしたてた。「今の伝言をムツシユール・カルメッツに伝えるようにと言われたんです。わたしはこの（ビル・ダケム号）のただの甲板員なんです、お客様からの頼みとあつてはね。そのムツシユール・アルノーから指示されたんです、ムツシユール・カルメッツという人が自分を探しに来るはずだから、ここで代わりに待つてろつて。相手がムツシユール・カルメッツ本人だと確認した後で、ハーバーのこちら側の岸に高くそびえている柱、あの巨大なブリッジを支えている大きな支柱の陰でムツシユール・アルノーが待つてると伝えてくれつて」

「そうか、このとおり、おれはここに来た」カルメッツは陽気な調子で言った。「そしてあなたは伝言を伝えた。お疲れさん。あなたはもう帰つていい」

だが、フランス人は彼の結論には同意していないようだった。ぼんやりと考えるような調子で言った。「いえ、まだ帰れませんね。せつかくシドニーまで来たというのに、この哀れな船乗りは街で楽しむ代わりにひとり寂しく埠頭で人を待つてなきゃならなかつた。その不都合を、賢明なるムツシユール」

「アルノーはよくご理解くださったのですがね……」

カルメッツは色とりどりの光が点滅する暗闇の中で冷たくにやりと笑った。ポケットに手を入れると、柵の向こう側で期待しながら待っている相手の手のひらに手を伸ばした。

「メルシー、ムツシユーー！ やはりあなたもご理解とお心遣いのある紳士だったのでね、ムツシユーー・カルメッツ！」

「その名前を忘れるための金だ」カルメッツは鋭く言い返すと背を向けた。「二度と思ひ出すな」

「もう忘れましたよ」船乗りの男がうきうきしながら言った。「さよなら、^{アデユー}名なしのムツシユーー」

アデユーか。直訳すると、神に向かつて、という意味だ。フランス人というのは、無意味な挨拶にも軽々しく神の名を使う。だがその夜、カルメッツと名乗っていた男は本当に神の御許みもとへ向かうことになるのだった。なぜなら、女王はその夜、いつにも増して狡猾な気分だったからだ。女王が彼にほ笑みかける。誘い込むような笑みで。寶石で飾った胸の中に彼を温かく搔き抱く。片手で優しく撫でながら——今にも殴りかかろうと、もう片手を高く振り上げた……。

カルメッツは来た道に戻って白いペンキ塗りの棧橋の入口を通り、いずれ電気鉄道のサーキユラー・キー駅の駅舎となるはずの混沌とした工事現場を過ぎ、埠頭の西側へ回った。早足になっていった。埠頭に並ぶ小屋や保税倉庫や船員用の宿泊施設の前を通り過ぎると、そこから先の建物は、ハーバー・ブリッジへのぼっていく道路の下にもぐり込んでるように見えた。ハーバーの岸沿いに大きな曲線を描く道路に向かってコンクリートの歩道が伸びており、きれいに刈り揃えられた堅い草がびっしりと生えた空き地が、その道からなだらかに下っている。ここまで来ると、人影はほとんど見えなくなった。誰でもゆっくり座れるようにとシドニー市議会がご親切にも設置したベンチに、はた

して狙いどおりと言えるのか、じつと座り込んでいる人影が二つ、三つあるだけだ。どれも孤独な人間だ。傷心の者、帰る家のない者、失望した者。自分たちには目もくれない冷たい女王に、無意識のうち魅了されてしまった奴隷たちだ。無言の浮浪者たちの横を素通りし、カルメッツは巨大な石造りの支柱に向かって伸びるコンクリートの歩道をずんずん歩いて行った。歩道の奥で大きなダブルアーチを描くブリッジが、まるでハーバーを跳び越えようと屈み込んでいるように見えた。

彼の頭上百七十フィートではトラムやバス、電車や自動車、広い橋の上をひっきりなしに走っていた。巨人の体を車輪のついた昆虫たちがせかせかと這いまわり、苛立つた巨人が轟くような唸り声を上げている。こちらとは対を成す支柱が立つ向こう岸では、目もくらむほどまぶしい櫓や仏塔が寄り集まって、橋の下の水面を明るく染めている。二本の塔のあいだに間の抜けた顔が宙に浮かんでいるように見えた。頭から生えた電気仕掛けの髪が明るく点滅している。口は真つ暗なままだ。いや、そもそも口がないのだ。口の代わりに、まるでモレク神に生贄を捧げるような穴がぼっかりと空いている。ルナパークの入口だ。

だが、やがてカルメッツの目の前に支柱が立ちふさがって、その恐ろしい顔もルナパークの暗い穴も見えなくなった。シドニーの中心を向いた支柱の側面には、音が反響するだけの巨大な空洞への入口である木の扉がついており、その前にひとりの男がじつと立って待っていた。暗闇の中で葉巻の先が光り、香りが漂って来たが、男の姿はまったく見えなかった。それでもカルメッツは、彼こそ目当ての男だと確信した。

「アルノーか？」彼は声をひそめて尋ねた。

「カルメッツか？」甲高い声が訊き返してきた。

「そうだ、カルメッツだ」

「そうか」アルノーはフランス語で言った。「この国ではこんなとき、初めまして」といふべきなのだろうな。そして次に天気の話をする。ちなみに、今夜はお気づきのとおり、この完璧とはほど遠い世界にしてはこれ以上望めないほど完璧な天気だ」

「そして天気の話題に続くのは」とカルメッツはとげのある口調で返した。「どうして〈ベル・ダケム号〉の船員なんかに指示されて、こんなところまで来なきゃならなかったのかという質問だ。あんたとは船で会う約束じゃなかったのか？」

「危険すぎる」アルノーは即答した。「人が多すぎるし、明るすぎる。〈ベル・ダケム号〉は今朝シドニーに着いたばかりで、波止場の周りをうろついているやつらはまだあの船に注目している。船に降り降りすれば、必ず人の目につく。ここの暗がりなら、誰にも見られずに済む。ここなら、あの連中の中に紛れ込める」

そう言いながら、ベンチで身動きもせずに座っている暗い人影のほうへ葉巻を向け、灰をまき散らした。

「話を聞かれるかもしれないぞ」

「その可能性はさわめて低い。だが、仮に聞かれたとして、だからどうだと言うのだ？ フランス人以外に、この国でフランス語を理解できる人間などいるのか？ この国の連中だぞ？」オーストラリアの全国民を侮辱するかのようになり、葉巻の火が大きな弧を描いた。「やつら、まともな英語さえ話せないじゃないか」

「そういうことなら——」カルメッツは暗闇の中で苛立ったような身振りをした。「さっそく仕事の

話に入ろう。よく聞け、アルノー！ 伝えなきゃならないことがたくさんあるんだ。〃包み〃を載せた船はすでに到着し、荷降ろしも済んでいる。が、偶然にも——この先何度も同じ〃偶然〃が起きるのだがね——至極合法的で堅気な輸入会社である〈マーカントイ・ブラウン・アンド・ユーエル社〉の、同じく至極合法的な委託輸入品の荷物に紛れ込んでしまった。ナポレオン・ストリートにある輸入会社だ。今われわれが立っているここからそう離れていない——」

「どこかはわかる」アルノーが遮るように言った。甲高い声で、関心がなさそうに言う。「その辺りには行ったことがある……通りの名がナポレオンとは——しゃれが効いてるじゃないか！ かの皇帝はかつて、ある都市についてこんな言葉を残している。『いかにも略奪しやすそうな街だ！』とね」

「どこの大都市にも門番の立っていない門は必ずあるものだ」カルメッツが無感情に答えた。「その輸入会社に、ある若者が働いている。名前はウイリアム・スタンリー・フィッシャー。輸入した商品の発送を担当している。そしてこのフィッシャーという若者は、われわれの協力者でもある。そこで、あなたは彼を訪ね、届いた荷物の中にムツシユー・ルヴァン宛のエジプト煙草の包みが紛れてしまったので引き渡してほしいと伝えろ。彼は即座に承諾し、包みを渡してくれるはずだ。具体的に何と答えるかまではわからないが、すぐに包みを渡して——」

「彼が何と答えるかは聞くまでもない」アルノーはクスクス笑いながら言った。「オーストラリア人なら『あいよ、相棒』と言うに決まってる。そうでなかったとしても、同じく不作法で間の抜けた言い回しのはずだ」

カルメッツはその侮辱は無視して言った。「今教えた固有名詞を繰り返してみてくれ」

「〈マーカントイ・ブラウン・アンド・ユーエル社〉」アルノーは素直に応じた。「住所はナポレオ

〔著者〕

ノーマン・ベロウ

本名シリル・ノーマン・ベロウ。1902年、イングランド南部イースト・サセックス州、イーストボーン生まれ。詳しい経歴は不詳。生後間もなく一家でニュージーランドへ定住し、カンタベリー大学へ進学。第二次世界大戦中に六年間の軍役に就いたとされている。1986年死去。

〔訳者〕

福森典子（ふくもり・のりこ）

大阪生まれ。国際基督教大学卒。通算十年の海外生活を経験。主な訳書に『消えたポランド氏』、『盗まれたフェルメール』、『間に合わせの埋葬』（いずれも論創社）など。

じゅういちばんめ わざわ
十一番目の災い

——論創海外ミステリ 234

2019年5月20日 初版第1刷印刷

2019年5月30日 初版第1刷発行

著者 ノーマン・ベロウ

訳者 福森典子

装丁 奥定泰之

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
TEL:03-3264-5254 FAX:03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
WEB: <http://www.ronso.co.jp>

印刷・製本 中央精版印刷

組版 フレックスアート

ISBN978-4-8460-1830-6

落丁・乱丁本はお取り替えいたします